

子どもの本

研究会



【私の一冊】



『大河の一滴』

五木寛之 著

(幻冬舎文庫)

高濱和夫



『大河の一滴』は、人間洞察に関するといつてよい、五木寛之のエッセー集である。表題を含む「人はみな大河の一滴」を始めとする五つの大項目の下に、全部で47編のエッセーが収められているが、多くは色々な媒体で発表されたものの再録である。取りまとめられて、五木寛之のワールドが珠玉のように広がっている。

松永伍一が文末の解説で「生に対する真剣さの度合いが深まることによって文体の重みが増した、ということ、それも五木さんの老いの賜物である」と述べているが、それは取りも直さず、生命体としての人間というものにそれほど肉薄したということではないだろうか。

人は肉体をもつ生理的な存在であることはもちろんだが、精神的な存在であり、「それ以上の存在」であるかも知れない。自然科学はめまぐるしく進歩し、医学を含む生命科学も細分化、先鋭化しているが、それでも生命体としての人の実存を捉えきれていないわけではない。私がこの本を読んで驚いたのは、自然科学者でも生命科学者でもない五木寛之が、自らの体験と勉強、思考・考察により、人間というものへの「実存」に迫っているように思えたからである。自らを晒しつつ、人間についてこれほど正直に語ったことに深い感銘を覚え、弱い人間である私などは大いに癒され、救われるのである。

この本は、どこをめくっても、心に響く、素晴らしい文章が散りばめられている。

「草の葉の上の一滴の露にも天地の生命は宿る」「人間の生命は海からはじまった。人が死ぬということ、……海に還る、ということではないのか」「人はみな大河の一滴」それは小さな一滴の水の粒にすぎないが、大きな水の流れをかたちづくる一滴であり、永遠の時間に向かって動いていくリズムの一部なのだ」「もつとつつましく、目を伏せて生きるほうがいいのではないか」「私たちの体も、この宇宙にあるもの、そして地球にあるもの、そういうものどこか共通のような気がします。(中略) 目を閉じて、じつと耳をすませていると、そういう音が聞こえてくるような気がしなくてもありません。ただし、それは従来の科学では証明されないものです」

このエッセー集は、時代がコロナ禍もあって混沌とし、差別化・分断・貧困などが横行しつつある今こそ読まれるべき本かも知れない。



(熊本大学 名誉教授)

新年のご挨拶

特定非営利活動法人熊本子どもの本の研究会

理事長 横田 真

明けましておめでとーございます。

昨年2022年は、「コロナと共に」を模索しながら、新しい活動を開始できた年でありました。熊本でのコロナ感染者数の拡大に伴い、8月3日に予定していた講座とおはなし会は中止しましたが、それ以外の講座は全て予定通り、月1回のペースで開催することができました。それに加えて、9月には「横田幸子さんを偲ぶ会」、10月には多田多恵子さんを招いての公開講座「絵本に発見！植物の知恵」を開催することができました。研究会活動検討会（オンライン）での意見交換の中から、子どもと大人の読書会（オンライン）の企画が立ち上がり、8月7日に第1回、11月13日に第2回を開催しました。小学生、中学生の子どもたちが選んだ本をそれぞれ読んできて、子どもと大人が一緒に読んで感想を述べ合うことは、子ども、大人双方にとって幸せかつ刺激的な体験でした。2月には第3回を計画しています。8月28日には、これも研究会活動検討会の意見交換の中で企画

された「グリム童話の魅力」（オンライン）を会員の竹内識晃さんを講師に開催しました。その他、2カ月に1回の会報発行を着実に継続するとともに、おはなしボランティア「びわの木」

も継続的に実施いたしました。また、ふるさとくまもと応援寄付金（熊本県）の「NPO等支援分」の対象団体への登録を申請し、承認されました。これにより、熊本県へのふるさと納税を通して、日本中の方から活動へのご支援を受けられるようになりました。

2023年も「コロナと共に」という覚悟の下、実際に集まってくる講座活動を万全の感染防止対策をとって継続して参ります。また、会報の発行とともに、おはなしボランティア「びわの木」を着実に実施してゆきます。子どもと大人の読書会は児童の参加者数を増やし、研究会の中核的活動の一つとして定着させていければと思っています。さらには、グリム童話勉強会の次回会合やびわの本文庫の活用に関する新規企画などの立ち上げも検討して参ります。

2023年度は研究会の40周年にあたります。皆様のご参加とご支援の下、研究会の活動の幅をさらに広げて行ければと思っております。本年もよろしく御願ひ申し上げます。

報告

講座 文字の多い絵本を読む

◇日時 11月16日（水） 10時～12時
◇会場 熊本県民交流館パレア会議室
◇参加者 7名
◇担当 木村 一恵

■今回のテーマを選んだ理由

おはなし会や親子で楽しむ絵本で、なかなか手に取れることがない文字の多い絵本（以下長編絵本と略）だが、出合わないのはもったいないと思う絵本がたくさんある。そうした絵本を面白い、どうしたらたくさんの人に届くか考えたい。

■作品を紹介しながら提示する

小学校等で一時限のお話し会の機会を頂いたら、お薦めしたい絵本がある。まず『ペニーさん』（マリー・ホール・エッツ作／松岡享子訳）。二十数年来の人気絵本で人間と動物の間に温もりが通う。怠けがちの動物がペニーさんの献身に報いようとしたことで働く喜びを知り、昼夜別なく働く。真黒の頁は夜の農作業を想像させる。『時計づくりのジョニー』（エドワード・ア

ーデザイナーニ作／あべきみこ訳）は、夢を追いつつ続け実現させる子の成長を描く。『ロッタちゃんとしてんしゃ』（リンドグリーン作／ヴィークランド絵／山室静訳）は自由奔放でやりたい放題のロッタちゃんを生き生きと描く。絵も秀逸。長編作品へのきつかけとなる。『ロバのおうじ』（グリム童話よりM・ジーン・クレイグ再話／バーバラ・クーニー絵／もきかずこ訳）は長編絵本で以前覚えたもの。最後ロバが皮を脱ぎ王子になるところを私はパッと王子に変わったと表現したがどうだろうか。『ほしになつたりゅうのきば』（君島久子再話／赤羽末吉絵）は昔話から物語への導入。長編絵本も一人で読むより子どもと楽しめ、絵も力になる。今日はそんな絵本にまつわる話を聞きたい。



■感想や持参絵本を紹介して課題を深める

（以下参加者からのコメント）

▼コロナ禍下のお話し会用の絵本は短いものを選びがち。紹介絵本の他『急行「北極号」』（C・Vオールズバーク作／村上春樹訳）、『ギルガメッシュ王ものがたり』（ルドミラ・ゼーマン著／松野正子訳）を推す▼『手ぶくろを買いに』（新美南吉作／黒井健絵）は物語の良さに子守唄も入



り、子どもも好む。『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』（バージニア・リー・バートン作／村岡花子訳）、『はたらきもののじよせつしやけいてい』（同作／石井桃子訳）等、乗り物絵本は子に何回も読まれ、時刻表に興味を持ち、今や乗り鉄である。長編絵本も声を出して読めば癒される▼『ようこそ！花のレストラン』（多田多恵子作）は図鑑絵本的に部分から読んでも良い。私もロッタちゃんは好き。リンドグリーン作品は『ロッタちゃんはじめのおつかい』『長くつ下のピッピ』や作者の半生も映画化された。『平家物語』等古典の絵本化は文学への入口だ。読み辛い▼『時計つくりのジョニー』に共感。『ロバのおうじ』の最後は皮を脱いだとすべきたろう。グリム童話のシンデレラ譚の一つに「千匹皮」があり、そこでは不本意な結婚を迫られた王女が動物の皮を着て逃げ出す。『ナルニア国ものがたり』（C・S・ルイス作／瀬田貞二訳）の絵本化に『ライオンと魔女と衣装だんす』（田中明子訳）があるが、物語の核心の古い魔法を解いて復活する部分を素通りしているし、英国家を象徴的に想起させる衣装だんすを題に入れる等、ダイジェスト版には不満が残る。先ず『ライオンと魔女』（瀬田貞二訳）を読むべ

きたろう▼長編への入口として一定の意味はあるのでは。短い話から長編物語に入れる。だが、ダイジェスト版や抄訳の課題はその力量が問われる。多数の絵本化があるシンデレラの内容はどうか▼『ピーターラビットのおはなし』（ビアトリクス・ポター作／石井桃子訳）は途中からでも面白い。『クマのプーさん』（A・A・ミルン作／E・H・シェパード絵／同訳）も小さいお話の集まり。新たにキャラクターが登場し全体の作品となる▼『ほしになつたりゅうのきば』は12枚の紙芝居を観た時は面白かったが、自分でしてみると物足りない。子どもは本来耳が良く、目で文字を追うより読んでもらう方が好き。小学校の時の先生の『夜あけ朝あけ』（住井すゑ著）の朗読が心に残っていて、びわの木文庫にあり記憶が甦った▼最近オンラインでの読み聞かせを聞いたが、子どもからは不評、教育テレビの勉強みたいで面白くないと言う。聞く側の評価は、対面を十とするとオンラインはかなり低い。面と向かって交わす言葉で抽象概念が養われるわけだし、抽象的な言葉は本から学ぶ。身近な例で母親が2歳前の幼児に頻繁に話しかけていたら、片言のお喋りの中に助詞を使い出した。その点でも映像より生の言葉が良い▼人

間は言語を習得しながら、言葉で考えるから、母語が身に付かないと理解が不足する。ネット検索に頼ることで満足してないか心配。JR車内も若者はスマホ依存で、読書する人は皆無。原作のアニメ化も問題、「ムーミン」は原作とイメージが違うと子どもの弁。「小公女」（バーネット作）は心理描写が文脈にあり、アニメでは表現が難しい▼五高での夏目漱石のシェイクスピア講義は分かり易かったそうだ。漢文も心得る漱石は語彙が豊富で面白かったそうだ。『くまのパデントン』（マイケル・ボンド作／松岡享子訳）も良い。丁寧語で話す一方、その振る舞いによりドタバタ劇になるのが面白い。絵本版ではそれは表現し難い。絵本は力ある人に描いてほしい。難しいことを噛み砕いてやさしく言うのは難しい▼今回テーマの文字の多い絵本は多様で、絵本としての成功、失敗や長い物語としての限界もあるのではと思う。例えば『子どもたちのアンデルセン』（スベン・オットー絵、『かえるの王女―ロシアのむかしばなし』（タチヤーナ・マーヴリナ絵／まつやさやか訳）はいずれも文字の詰め過ぎである。児童文学は抄訳を読み、それで終わりではない。『チムとゆうかなんせんちようさん』（エドワード・アーディン

―二作／瀬田貞二訳）は、男の子の冒険心に心躍る。『ロッタちゃんとしてんしゃ』のロッタちゃんのお転婆な行動が面白い。お薦めは『あるきだした小さな木』（ボルクマン作／セリグ絵／花輪莞爾訳）。1頁ごとの挿絵が理解を助けて展開も面白い。他に『雪わたり』（宮沢賢治作／堀内誠一画）は筑摩書房の原文に則り、雪国の子どもや情景描写が生きている。『木を植えた男』（ジャン・ジオノ作）は教科書にも掲載されたノンフィクション絵本。一生を懸けて木を植え続ける話は心揺さぶられる。

■今回の課題と方向性

感想より課題の多く出た講座になった。次に繋がる内容もある。例えば昔話の再話でも長いもの、短くて省略しているなどである。今後は昔話絵本の再話者や画家による表現や受け取り方の違いを比較してみたいという話も出た。また、『はてしない物語』や『指輪物語』等の映画化、『ムーミン』や『きかんしゃトーマス』等の絵本もアニメ化されているが、原作を踏まえる違和感があるとの指摘や危惧が表明された講座となった。



（報告 有久賢治）

報告 田口祐子さんをお招きして

クリスマスおはなし会

〈講師〉 田口祐子さん

おはなしの会クレヨン代表／福岡県大牟田市在住。絵本の読み聞かせやおはなし会、講演、講座など、子どもの読書活動を支援している。

*紙芝居と工作タイム担当 田口浩一さん

（日時） 12月14日（水） 10時～12時10分

（会場） 熊本市立図書館集会所

（参加者） 12人

○プログラム

①魔女とにじ色のねこ

（語り）『テリー・ジョーンズ童話集その1 イースト・オブ・ザ・ムーン』テリー・ジョーンズ著

マイケル・フォアマン絵 さくまゆみこ訳 リブリオ出版

②鏡（語り）『大人にしてあげた小さなお話』

岸田今日子 大和書房より）

③びんぼーびんぼう だいはんじよう

（紙芝居 となみゆりこ脚本 かみおかのりみ

絵 文民教育協会子どもの文化研究所

〜工作タイム〜 『ムカデ』の標本

④丘のうえのクリスマス（テーブルシアター）



⑤大男と小人（語り 『クリスマスの夜1』おはなしかごより）

⑥ガヴェイン卿とラグネル姫（語り 『アーサー王物語』R・L・グリーン編 厨川文夫・厨川圭子訳 岩波少年文庫より）

はじまりのお話は『魔女とにじ色のねこ』。お話はいつでも私たちに生きていく力や勇気を与えてくれる。コロナ禍は続いているけれど、今こそ自分の力で未来をつくろうと思った。たっぷりとしたお話の時間が流れる。合間の紙芝居には笑い、『ムカデ』の標本には悲鳴を上げた。そして「標本」作製のご指導をいただき、ワクワクするお土産もできた。さあ、後半のお話へ。人进行うやさしさや人を信じる大切さを忘れたくない、お話はそういう気持ちで灯してくれた最高のクリスマスプレゼントだった。

*

当日、受付で参加者の方にお渡ししたのは田口さん作成のプログラムと、研究会からのクリスマスオーナメント風の短冊。短冊には講師の紹介文とお話のタイトルが、赤と緑の糸糸で編んだリースやぶつくりとしたネコのシールで飾られていた。ツリーに下げて、ふと目をやった

とき、お話がよみがえって、またほっこりあたたかな時間が訪れますように。

（報告 木村一恵）

報告 第5回研究会活動検討会

日時… 12月11日（日） 10時～11時半

場所… オンライン会合（ZOOM）

参加者… 4名

【イベント開催結果フォロー】

○11月13日 第2回子どもと大人の読書会
〓今回も盛り上がりつつよかった〓参加児童をもう少し増やしたい。

【開催予定イベントの状況確認】

○1月18日 講座「昔話の形式について」
・講座紹介をホームページに投稿し、会員内外の参加者増につなげたい〓小沢俊夫先生の業績を紹介後、各自が好きな昔話を持ってきて意見交換する予定。

○2月5日（予定）第3回子どもと大人の読書会 課題図書〓小学生『トリア先生と闇の貴公子！』／中学生『都会のトム&ソーヤ』
○2月15日 講座「参加型の絵本を読む」
・参加型に使える絵本や詩などを紹介する〓ス

ズキコージさんの絵本を使って参加型のおはなし会を支援学校で実施すると盛り上がる。

○3月15日 閉講講座〓おはなし会を予定

【今後の講座活動について】

・働いている方々に参加してもらうために、講座を土日に開催することも検討する。

【おはなしボランティア「びわの木」】

・龍田児童館、河内小学校（学年毎に実施）など開催要請が増えてきており、実施体制の強化を検討〓会報、ホームページで開催日などを早めに紹介することでボランティアを募りたい。

【2023年度の講座活動計画】

・12月中にはまとめる方向。

【創立40周年事業（2023年度）】

・公開講演会の開催を念頭に、想定している講師に講演の可否を相談する。

◆おはなしボランティア「びわの木」日程（予定）

・1月28日（土） 13時～15時45分
パレアフエスタおはなし会

・2月2日（木） 11時～11時20分

県立図書館（0歳対象）

・3月2日（木） 11時～11時20分

県立図書館（0歳対象）

報告 第2回 子どもと大人の読書会

◇日時 11月13日(日) 10時〜11時50分

◇場所 オンライン会合(ZOOM)

◇参加者 11人 小学3年生2人/中学1年生2人/大人7人(会員4人、子どもの母3人)

◇司会 興津 暁子



課題図書は小学生の部が『火曜日のゴースト』

はヒキガエル』(ラッセル・E・エリックソン作、

ローレンス・デイ・フィオリ絵、佐藤凉子訳、

評論社)、中学生の部が『モモ』(ミヒヤエル・

エンゲ作、大島かおり訳、岩波書店)。子ども参

加者が本を選んでくれた。

【小学生の部】

・小A 3回読んでも全く飽きなかった。一番面白かったのはミミズクのジョージとヒキガエルのウォートンが一緒にお茶をして楽しく話をしているところ。ウォートンが優しいし、ジョージも本当は優しいことが伝わってくる。

・小B 私もお茶会のシーンが一番面白かった。夜のお茶会では2人とも御機嫌なのに、翌日なるとジョージの態度が変わり、火曜日になったからお前は食べてやるぞと言うところが面白い。

・大C 仲良くしていたのに、ウォートンが逃

げる準備をしているのが分かると、ジョージの機嫌が悪くなる。そういう人は自分の周りにもいる。虫は嫌いだ、モートンの虫の料理はとても美味しそうだった。

・大D おばさんにお菓子を届けたいという優しい気持ちで冒険につながり、2人が友達になって世界が広がっていく。心温まる話だった。

・大E ジョージは最初からウォートンを食べる気はなかったのでは。だからウォートンが逃げ出そうとしたのが分かると、せっかく楽しくやっているのに、何だよこいつと思う。

・大F ワクワクしながら読んだ。ジョージがキツネに捕まったのは、ウォートンが大好きなネズミの実を取ろうとしたからだとか分かったくらいでは泣いてしまった。翻訳が素晴らしい。

・大G 面白くてシリーズ7巻を一気に読んでしまった。面白さの理由は、意外性にあると思う。ウォートン自身で困難を解決していくのかなと思っただけで読むと全く違って、他の人が解決してくれる。それは、ネズミを助けたり、ジョージとお茶を飲んだりして関係性を作っているから。それが結局ウォートン自身を助けることになる。

・大H ウォートンに「自分に名前をつけると

すれば」と聞かれたミミズクが「ジョージかな」と言うところが面白い。「おやすみジョージ」なんて言われたら、もう食べられないよね。それなのにジョージの大切な砂糖菓子を食べた後、「(これを作った)モートンというやつもうまいんだろな」なんて言う。このあたりの掛け合いがブラックであり、ほのぼのとしている。

【中学生の部】



・中I モモの友だちの大人の様子が、時間がたくなると盗まれたときで全く変わる。モモが「灰色の男たち」と戦うところも面白い。「時間とは、生きることそのもの」という言葉がとても好きで、こういう深い言葉がたくさん出てくるところが魅力的だった。

・中J びわの本文庫でこの本を知った。まず面白かったのは、各章の小見出し。例えば10章の「はげしい追跡と、のんびりした逃亡」や20章の「追手を追う」。あべこべだが読んでみると意味が分かる。みんながモモに話を聞いてもらうと勇気が湧いたり、いい考えが浮かんだりするところもすごい。ぼくも、なぜお小遣いをためられないのか聞いてみたくなった。それから、モモが時間どろぼうから時間を開放する仕事を

マイスター・ホラに依頼されたとき、それを引き受ける決断力と勇氣にあこがれた。

・大C 亀のカシオペアが好き。先のことは分かるが、後は振り返らないという特徴がいい。

・大E モモを読むのは3回目。若いころは時間どろぼうが言う「効率的にする」ことに追いまくられていた。しかし年を重ねて、時間を豊かに過ごすことの重要性が分かった今なら、時間どろぼうに対抗できると思う。驚いたのは子どもたちの想像力。夕立の中で航海ごっこを楽しくやるのは、この年では無理かな。同じイメージを共有しながらみんなで遊んだことが昔はあったなと懐かしみながら読んだ。

・大F 時間どろぼうにたきつけられて余裕を失っていく大人たちの姿を、効率重視の現代社会への警鐘として読んだ。印象に残ったのは冒頭部分。異様な見かけのモモを近所の大人たちが受け入れ、部屋を整えてあげるところがとてもいい。自分が理解できない事象や考えに不寛容な人が多い世の中だけになおさら感動した。人の話を黙ってじっくり聞くモモの美質もすてき。現代人は、人の話をじっくり聞く余裕がない。相談を持ち掛けられると、話を聞かずにすぐに解決策を提示してしまう。



・大G 『モモ』は愛読書。日頃心の中で「モモになれ、ベツポになれ」と唱えている。ベツポの言葉の一つ、「世の中の不幸はすべて、みんながやたらとうそをつくことから生まれている。わざとついたらうそばかりではない。せつがちすぎたり、正しいものを見きわめずにうっかり口にしたりするうそのせいなのだ」はまさにそのとおり。時間に追われて自分の意図しないことを言ってしまうことがある。

・大H 大事なことが詰まった本だ。まず、モモの聞く力。モモに話をすることで自ら考え解決できるようになるのは、聞き手の力だ。それから時代や場所の設定が分からない点も面白い。過去の話のようでもあるし未来を暗示しているようにも思える。ベツポの言葉は、私の心にも響いた。「すごい勢いで働きまくる。・・そしてしまいいには息が切れて、動けなくなってしまう。まさしく私。身につまされた。

・大E 大人は『モモ』を読むと反省が多くなるが、中学生は。

・中J 塾や部活が増え、小学生の頃よりも忙しくなっているが、余裕はある。今の生活を続けたい。

・中I 時間を無駄にしているところがあつた

のでこの本を読んで時間の大切さを感じた。

・大H 効率は悪か。

・大E この本の中の大人は、効率を上げるというより手を抜いている。本当の意味での効率性とは、質やコミュニケーションを保ちつつ短時間で済ませることだと思う。

・中J 効率は大事だけれど、友だちと仲良く話をする時間がないと人生はつまらない。

・中I みなさんの意見を聞いて、時間を大切にしたいというぼくの考え方では灰色の男たちに時間を取られそうなのでベツポのようになりたいと思ひ直した。

・大人一同 それは危険(笑)

・大H 時間を大切にしたいというIくんの考え方はとても健全。ぜひ、集中すべきときは集中するという時間の使い方をしてほしい。

・中J 来週、中間試験なので朝読書の時間は試験勉強にあてられているが、僕はしれーっと読書をしている。これからもそうしたい。

・大H モモは読むたびに感じ方が違う。時間を置いてまた読みたい。

(報告 横田 恵美)

※紙幅の都合でエッセンスのみ掲載しました。フルバージョンがホームページ「会員の広場」にあります。





1〜3月の講座・会合の案内



○講座 昔話の形式について

・日時 1月18日(水) 10時〜12時

・会場 熊本市立図書館集会室(予定)

○子どもと大人の読書会(オンライン)

・日時 2月5日(日) 10時〜12時

○研究会活動検討会(オンライン)

・日時 2月12日(日) 10時〜12時 合

○講座 参加型の絵本を読む

・日時 2月15日(水) 10時〜12時(水)

・会場 熊本市立図書館集会室(予定)

○閉講講座

・日時 3月15日(水) 10時〜12時

・会場 熊本市立図書館集会室(予定)

「おはなし」を楽しみ、語り合います。

★参加には事前申し込みが必要です。講座・会合名、お名前、連絡先を明記のうえ、メールかFAXでお申し込みください。

メール(講座) kouza(a)kodomonohon.org

(その他) zoom(a)kodomonohon.org

(a)を@に変えてアドレスにしてください。

FAX 096・382・5090

本はともだち!



今号の「私の一冊」は文化講演会／宇城の会長でもある高濱和夫・熊本大学名誉教授にご寄稿いただきましたが、文化講演会／宇城に関して高濱会長と私を繋いでくださったのは、岩波書店社友で母(横田幸子)が非常にお世話になっていた今井康之様(2021年11月号に母への追悼文を掲載)でした。

そのような経緯で顧問を拝命している文化講演会／宇城の11月6日の講師は、宇宙飛行士の毛利衛氏でした。毛利さんがスペースシャトルに搭乗して初めて宇宙に旅立った時(1992年9月12日)、米国留学中の私はケープカナベラルで毛利さんの打ち上げを見守っていました。そのことを高濱さんに伝えたところ、講演会の司会役を私が行うこととなり、講演前に毛利さんとも個別にお話する機会を得、打ち上げを見守っていたことに加え、私自身が経済産業省や内閣官房で宇宙開発政策に携わっていたことなどを紹介できました。

講演会終了後電車に乗っているとき、高濱会長より、毛利さんから私宛の署名本を預かったとのご連絡をいただきました。そうしていただいたのが、『わたしの宮沢賢治 地球生命の未来

図』(毛利衛著 ソレイユ出版)です。「地球まほろば 毛利衛」という立派な署名入りで、研究会の宝として大事にしたいと思います。北海道で育ち、大学の教員から宇宙飛行士を目指し、そして宇宙に行ったそれぞれの時に感じたことを、宮沢賢治の言葉と絡めながら紹介されているエッセイ集です。びわの木文庫にお寄りの際には手にとっていただけだと思います。

毛利さんの講演の前に祝辞を述べた守田憲史・宇城市長は高校時代の同期で、彼にとつては同期の私が何故か司会を務めているというドッキリ的な再会でした。11月6日は、人のつながりのありがたさを感じさせられた1日でした。前号で紹介した橙書店には『神話的時間』『神話とのつながり』『子どもが見つけ本』を置いていただけることになりました。ここでも新しいつながりができました。(横田真)

■編集＝金子・上林・横田・イラスト＝安田

特定非営利活動法人

熊本子どもの本の研究会 発行

〒861-8029

熊本市東区西原一丁目15の24

ふるさと納税経由でも支援いただけます。

<https://kodomonohon.org/2022/08/17/furusato/>